アイヌ民族による散文説話「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」についての交差対句資料
—話者が口承を記憶するメカニズム—

Chiastic structure data about the prose tale "The mother and the father having given *Wajin* the son and having placed him" by an Ainu race
—The mechanism which memorizes narration—

大喜多　紀明
アジア民族文化学会

Noriaki Ohgita
Association of Asian Folk Culture Studies

キーワード：アイヌ口承文芸，修辞論，交差対句，語りの構造
Key words：Ainu oral literature, Rhetoric theory, Chiasmus, Structure of narration

抄録

本稿では，田村が採録した，平賀サダモ氏によるウウェペケレ「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」[1]をテキストとして，交差対句を調査する視点からの修辞論的な分析を行った．テキストには，18対の対応を持つ交差対句が見出された．本稿の目的は，口承を記憶するためのメカニズムの解明を視野として，テキストに表出される交差対句についての資料を提示することにある．それに加え，ウウェペケレに見出される交差対句における対応の数や対応の出現頻度を比較する視点から分析は現在までなされていないので，本稿は，この件についての調査における手始めの報告でもある．

1．はじめに

本稿では，アイヌ民族の口承文芸における一ジャンルであるウウェペケレ（散文説話）の中でも，田村が採録した，平賀サダモ氏（以下敬称略）によるウウェペケレ「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」[1]をテキストとし，その構造を，修辞論的な視点から分析している．なお，本稿での分析は，テキストに現れる交差対句に着目し，それを調査する視点に焦点を絞っている．本稿の調査の結果，テキスト「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」には，筆者の解釈によれば合計 18 対の対応を持つ交差対句が確認できた．ここで，アイヌ口承資料に表出する交差対句が，アイヌ民族における特徴的な修辞表現法の一つであるという認識が本稿の前提である[2]．

アイヌの口承資料には，しばしば交差対句と解釈できる修辞技法が使用される．ところが，本稿におけるテキストの場合のような対応数が多い（と解釈できる）交差対句を持つ口承は今まで確認できていない．そのような意味では，本稿で紹介するテキストに確認される対応数の多い交差対句の事例はめずらしいのではなかろうか．

さて，アイヌが無文字による文化であるということを鑑みると，アイヌの民族性を理解する上では，彼らが継承してきた口頭文芸についての調査が重要な研究の視座の一つとならざるを得まい．アイヌにおける潤沢な口承の種類もさることながら，時には数日という時間を費やさなければ一編の口承の全てを語りきることができないほど長大な英雄叙事詩の存在も知られている．このような長大な口承を記憶するためのメカニズム[3]や話者が使用する修辞技法[4]については，今までの研究

の中で考察されてきた．

口承話者が使用する修辞技法についての調査は，アイヌ民族の生活的な伝統に基づく心性を理解する上で有用な知見を提供すると言える．筆者は現在まで，アイヌ口頭資料に使用される交差対句表現に対して特に焦点を絞り調査を行ってきた[5 - 7]．本稿は，その一連の研究の一環として位置付けられる．

なお，筆者は，交差対句の使用が，アイヌにおける口承を記憶するメカニズムに何らかの関わりがあるという理解をしており，本稿でテキストとしたウウェペケレ「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」のような，話者が語りきるにあたって数日を要するほどの規模ではないものの，比較的規模の大きなものにおける交差対句についての知見は，口承を記憶するメカニズムを解明する上で有用であると考えている．本稿の目的は，アイヌ民族における口承を記憶するメカニズムを検討する上での修辞論的な資料を提示することにある．

本稿で調査の着目点としている「交差対句」は修辞技法の一種である．本稿では，例えば，A と A´ や B と B´・・・のような「語」・「句」・「節」どうしが構築する一連の対応が同心円状に配列した構文を，便宜上，交差対句としている．

本稿の２節では，5 編のウウェペケレに確認される主要な交差対句における「対応の数」と「対応の出現頻度」を示している．続いて，３節では，２節で示した 5 編のウウェペケレに比べて規模の大きなウウェペケレ「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」[1]のテキスト全文（日本語訳）を引用転記し，そこに確認される交差対句を示した後，交差対句を構築する各対応についての考察を加えた．最後の４節では今後の課題を提示している．

次に，テキスト「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」の話者である平賀について紹介する．なお，この紹介文は田村による[8]．

平賀サダモ，アイヌ名サタモ（*Satamo*），女．明治 28（1895）年ごろ，福満（*Piraka*）に生まれ，21 歳までそこで生活．姉妹 3 人の末．鳩沢ふじの氏の，すぐ下の異父妹．3 歳ぐらいの時，母のいとこの両親のもとにひきとられて，その老夫婦のもとで独り子として育てられた．養父 *Sankerek* 氏は *Piraka* の生まれ．養母 *Tumonteno* さんはウョッペ（*Uyotpe*，今の福満の内にあり，*Piraka* の隣部落）の生まれ．8 - 9 歳まで日本語を全然知らなかった．20 歳を過ぎてからは，旅芸人一座の一員として内地（本州）にしばらくいたこともあり，北見・釧路・樺太にいたこともある．調査当時は，勇払郡鵡川町字春日 3 区に，息子・娘との 3 人暮しだった．昭和 47（1972）年 8 月 1 日，平取町荷菜の，息子平野氏宅で死亡．生前，美声と博学で知られ，また，姉のワテケ氏没後の約 10 年は全道一のユーカラの大伝承者として活躍した．

ここで，アイヌ語と日本語の語順は概ね変わらないので，本稿での修辞論的な検討を行うにおいては，日本語訳テキストを使用しても大きな支障がないと筆者は判断しており，このことは本稿における前提である．この前提に基づき，本稿では，田村によって既に資料化されている日本語訳文をテキストとした．

２．交差対句における対応の数

本節では，「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」以外の 5 編のウウェペケレに見出される交差対句において，対応として解釈できる対応数を記載する．本節で採り上げたウウェペケレは①平村幸作氏による「平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました」[9]，②松島トミ氏による「クモと結婚した白キツネのウウェペケレ」[10]，③平村つる氏による「和人の夫をもった石狩の女の話」[11]，④二谷国松氏による「私はタンネサルに住む者です」[12]，⑤平賀サダモによる「小ザルが一匹」[13]である．なお，②から⑤のテキストに表出される交差対句の詳細および考察については別の機会に報告する予定である．

2.1.　「平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました」について

この節では，①「平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました」のテキスト全文と，そこに確認される交差対句を示す．①については，前稿で既に紹介されており[6]，ここではそれを引用している．テキストに付された下線と記号は筆者による．

<u>A 平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました</u>．貧乏ですから，つぶれかかった家

に住んでいました．飢饉になって食物もなくなったときに，B オキクルミ神の奥様が海産物の食糧を配給しに村じゅうを配り歩きました．その村の下のはずれに住む貧乏人夫婦のところにも鯨の脂肉をつかんで，窓から差し出したときに，その手を見ますと，とてもきれいな白い手を指しのべましたので，貧乏人夫婦は，
「（その手が脂肉よりも）一体どんな顔をしたものの手がこんなに美しいのだろう？」
と，貧乏人夫婦は話し合いました．
こう言って相談しました．
どんな体つきをしたもので，その手が美しいのだろう．その手を両方から，脂肉を入れるとき，つかんで引っぱれば，体を見ることができるから，そのようにしようと，貧乏人夫婦は相談しました．
そして，村じゅうに，まだ日が出る前から，そのオキクルミ神の奥様が，鯨の脂肉を家ごとに配りながら下って来たのですが，その貧乏人夫婦の家で，また，窓から鯨の脂肉をつかんで手を差し出した時に，貧乏人夫婦は両方から待ちうけていたものですから，その脂肉をつかんだ手の腕を，ふたりして両方からつかんで引っぱりました．
すると，東側の床の上で，小さいシャチが身もだえました．
すると，その貧乏人夫婦の家の上で，バリバリッと大きな音がしました．雷が落ちたのでした．
すると，その貧乏人夫婦は気絶して，人事不省になりました．
すると，
「どうしてか，村の下のはずれに雷が落ちた．雷の音もしないときに，雷が落ちたらしい音がしたぞ．
貧乏人夫婦が C 神様の咎めを受けることをしたのでなくて，こんな音がするのだろうか？」
と，村長が言いました．
そして，若者たちを，その貧乏人夫婦の家へ，走らせましたところ，貧乏人夫婦はふたりして気絶していました．
そして，東側の床の上に，オキクルミの奥様が配った脂肉がポイと捨ててありました．
ですから，オキクルミ神から D 村長の奥さんへ，次のように夢を見させました．
「E 人間の村が飢饉になって，F 人間をかわいそうに思い，G 私の村を憐れに思ったので，H 海の神様の娘を妻にしていたのだったが，貧乏人夫婦が私の妻の I 腕をつかんで，I´ 引っぱったので，H´ 妻はシャチだから，東側の床の上に表れた体を貧乏人夫婦は見たのだ．
そのことに，G´ オキクルミ神が腹を立てたので，もうこれからは，F´ 脂肉を人間に配り与えさせないから，貧乏人夫婦をどこか，他の川筋へでも E´ 他の村へでも，追い出してもして，そうしたら，また，お前たちに食べさせるが，そうでなければ，脂肉をお前たちに食べさせないぞ」
と D´ 村長も夢を見，奥さんも夢を見ました．
それから，村の下のはずれに住む貧乏人夫婦は追い出されても，そこへ行って食べる所もなく，住む所もないものですから，C´ 神様におわびをしました．オキクルミ神に村じゅうが御幣を削って，酒を作って，おわびをしました．
ですから，それから，また，B´ オキクルミ神の奥様は脂肉を配りました．けれども，その，貧乏人夫婦は，咎めを受けるようなことをしたために食べさせてもらえませんでした．ですから，A´ 「貧乏人はよくしてやると，悪い心，その悪い心のせいで，よい心をもっている金持ちも，貧乏人夫婦のとばっちりを受け，咎められ，物をもらえず，神様がかえりみてくれないのだから，貧乏人というものは，決して憐れむものではないぞ」
と，村長が言いました．それで，平取では，本当の貧乏人は憐れまれないのです．
と平取の長者がいましめの話をしながら，年老いて死にました．

①のテキストに確認される記号箇所を配列すると次のようになる．この配列は，筆者の前稿の引用である[6]．

A　前文
B　脂肉を配るオキクルミの奥様
C　貧乏人夫婦による咎を受ける行為
D　夢を見る
E　人間の村の飢饉
F　人間をかわいそうに思う
G　村を憐れむ
H　海の神の娘
I　腕をつかむ
I´ 腕を引っ張る

H´シャチ
G´腹を立てるオキクルミ
F´人間を憐れまない
E´他の村へ追い出す　食べさせない
D´夢を見る
C´村人による詫び
B´脂肉を配るオキクルミの奥様
A´まとめ

なお，筆者の前稿[6]では，A・A´からI・I´で示した各対応についての考察が書かれていないので，本節ではそれを記す．

Aは物語の導入部分に相当し，A´はまとめの部位である．BとB´には，共に，「脂肉を配るオキクルミの奥様」についての記事が配置されている．

Cには，貧乏人夫婦が神様の咎めを受ける行為をしたのではないかという村長の言葉が書かれているのに対し，Cには，神様に詫びをすることが書かれている．また，DとD´には，共に，「夢を見た」ことについて書いてある．Eは，村の飢饉についてであり，E´には，貧乏人夫婦を村の外に追い出さないと脂肉を村人に食べさせないとある．両者ともに，食べ物が食べられないことについての記述である．

Fでは，オキクルミ神が村人をかわいそうに思うことが書かれており，一方，F´には，村人をかわいそうに思わないオキクルミ神が書かれている．また，Gには，村を憐れむオキクルミ神の姿が描かれているのに対し，G´では，逆に，腹を立てるオキクルミ神の姿がある．HとH´には共に，オキクルミ神の妻が紹介されている．「海の神様の娘」が「シャチ」であることがわかる．そして，IとI´は両方とも，海の神様の娘の手をつかんで引っ張る場面であり，「つかむ」ことと「引っ張る」ことが対応していると解釈できる．

以上のように，①には合計9対の対応があると解釈できる．一方，テキスト①の文字数は1423文字である．なお，ここでの文字数には，テキスト冒頭の貧乏人夫婦による言葉の中の（その手が脂肉よりも）箇所を除外している．さらに，文字数を対応の数で割った値を算出すると，153.1となる．

2.2.　5編のウウェペケレについて

①の場合と同様の手法により，他の4編（②～⑤）についても調査し，算出した．以下，5編のウウェペケレにおける交差対句に見出される対応の数を示す．なお，一編のウウェペケレに複数の交差対句が見出される場合は，その中でも，最も規模が大きく対応数の多いものを選択した．加えて，各ウウェペケレにおける日本語訳の文字数を参考のため記載した．（句読点を含む）ここで，日本語訳の文字数がアイヌ語における語数に対して完全に対応している訳ではないのだが，口承テキストの長さや規模を表す指標としては，日本語訳文の文字数が有効な評価手法の一つであると筆者は判断した．なお，ウウェペケレ②については，元のテキスト[10]に記された採録者による相槌などを除外し，文字数として数えていない．

ウウェペケレ	対応の数	文字数	文字数/対応数
①	9対	1423	153.1
②	7対	1466	209.4
③	11対	2845	258.6
④	9対	1982	220.2
⑤	8対	1386	173.3
平均値	8.8対	1820.4	206.9

ここで，各ウウェペケレの対応数を文字数で割った時に算出される数字も上記の表に記載している．算出した値は，小数点以下二桁を四捨五入したものである．5編の平均値は206.9（小数点以下二桁を四捨五入）である．したがって，この5編のウウェペケレについてみる限り，およそ207文字に一対の対応が出現するという計算になる．

3．ウウェペケレ「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」について

本節は，「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」についてである．はじめに，日本語訳されたテキストの全文[1]を引用転記する．この「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」は，２節で紹介した5編のウウェペケレに比べると規模が大きい．ここで，付された下線・記号は筆者によるものである．

A 私には母と父がいました．私たちは人の大勢住む村の住人になって暮らしていましたが，父も私が小さいときには狩をし鹿でも，熊でも，どっさりとれて，それで育ててくれたのでした．けれども今は私も大きくなったものですから，村の人たちが山へ狩に行くとき，私も鹿やら熊

やらとって来て暮らしていました．そして，鹿の毛皮の売り物，熊の毛皮の売り物をどんどん作って，たくさんできていたのですけれど，いったいどういうわけでこんなことを父が言ったのかわかりませんけれど，

「B 私たちの一族は昔から交易をしないことになっているので，おまえが交易について行くのは許さないからな，行ってはだめだぞ.」

と言います．私は村の人たちについて行きたくて，

「今年こそは，ついて行きたいなあ.」

と思いましたけれども，父からだめだと言われると，行くのをあきらめていました．

ところが，C ある日，また村の人たちが交易に行くと，いつもいろいろな売り物を船に積んで行っては，宝器やら宝物やら，いろいろな衣料品の荷物などを，どっさり手に入れて帰って来る様子を見ていて，うらやましかったものですから，D 父はだめだと言ったのですけれども，隠れて，毛皮の売り物などをたくさん，山でこっそりと作って，それから山の方から，舟をこいで下って行きました．そして村の人たちが，沖へ出るらしく思われましたので，そこへ行って一緒になって，それから，私の船荷を前方に見ながら皆と一緒に沖へ出ました．

そうして，E ずうっとどこにどう行ったのか，和人の村に着きました．そして，ほかの人たちは，めいめい自分のお得意様をもっている人ばかりでしたので，それぞれそこへ訪ねて行っていますが，私はお得意様もなく，今回初めてやって来たのですから，どこの家を訪ねたらいいのかわからないので，荷物を背負ったまま，町の家並みにそって進んで行きました．しばらく行くと，町のまん中にとても大きな家，それこそ山ほどもある家，町の家並みの中でとび抜けて立派な家があって，その家の中から足軽がひとり出て来て，

「おっさん，おっさん，『お得意様がないのなら，うちに寄るがよい.』と大殿様がおっしゃるから.」

と言って・・・言いながら，私のあとを追いかけてきて，私を家の中に入れてくれました．家に入りますと，その大殿様，家のご主人様が，

「F さあさあ，私のそばにおいで，おいで.」

と言うものですから，私は荷物を持ったまま入って，すぐに，足をそばから洗われて，つれて行かれ，家のご主人様，大殿様のいる所へすぐにつれて行かれました．行きましたところ，

「さあさあ，私のそばにおいで，おいで．G あなたが今初めて来たのなら，私のところにまだだれも来たことがなく，アイヌの売り物がほしいと思っても，だれも来たことがないので，私もうらやましく思っていたが，いいあんばいにあなたが来てくれた．H さあ入りなさい，入りなさい.」

と日本語もちょっとまじえて言いました．それから，私がそばに座りますと，大殿様は喜んで，

「私にはひとりの息子があります．ところが，それはそれは太刀さばきも上手，槍も上手，学問もよくできるのですが，あまりに気性が激しくて，まちがいなく私の息子なのですけれども，わが子とも思えないほど恐ろしくて，何も，言うことにはさからうこともそむくこともできません．言うことには一言もそむくことができないほど気性の激しい息子を私は持っているのですが，毎日毎日，鳥を打ちに山へ行って，そして晩になってやっと山から帰って来ますが，帰って来ても，私たちは，話しかけることもできず，息子も私たちに向かって話しかけもしないで，すぐ寝間に行き，食事を出されて食事をすると，それからまたもや，まるで顔に火が這うようにまっ赤になって怒りを表して，また朝になると，起きてすぐ鉄砲を取って出て行きます．そして，「鳥を打って来る.」と言って，山へ行っては，晩になって帰って来ています．そういう息子で，わが子なのですけれども，その気性が激しいところが，私たちは恐ろしいのです．もうそろそろ晩ですから，帰って来るでしょうから，きちんとかしこまって，さっさと礼拝してくださいね.」

と私に言いました．

私はひどく恐ろしい気持ちがしていました．びくびくしながら待っていますと，そのうちに，晩になりました．すると，なるほど，ほんとうに，I 戸をあけてくれという声がして，戸をあけてもらった人が入って来て，J 私が見たのは，それこそ，おさむらいの中でもいちばん上のお方，勇者の顔つきをしていて，並の者とは顔つきからして違っていて，それはもう，若殿でも，見ただけで恐ろしいもの，目は小さな星のようにキラキラ光って，そこらじゅう見わたして，目玉をギョロギョロ光らせながら入って来ました．

入って来て，自分の部屋へ行きながら，
「K アイヌの親方を私のそばによこしなさい.」
と言いながら，自分の部屋へ行きました．それから，あのご主人様夫妻は困りきっています．
「言ったことには，さからうことができないのですよ．自分のそばに来るようにと言うのですから，ひざで歩いて，這って，そばに行って，何を言われても上手に答え，怒らせないように上手に答えなくてはいけませんよ.」
とそのご夫妻は言いながら，すっかり困りきっていました．けれども，
「そう言っているのですから，早くそばに行きなさい，行きなさい.」
とご夫妻に言われて，L そばにつれて行かれて，戸をあけてもらって，行きましたところ，若殿は，
「M さあさあ，そばに来い来い，そばに来て火にあたれ，あたれ.」
と言いながら，N 自分のかたわらをトントンたたきました.
そして，私がそばに行きますと，
「さあ，二人が食べる分，早くごちそうを作って，二人が飲む酒も一緒に持って来なさい，来なさい.」
と奉公人たちに言いました．すると，そのとおりに，身分の高い和人の食べる，いろいろなもの，食べものの上等なもの，お酒のうまいのを，次々に運んで来て，二人分を私のそばに置きました．そして若殿は，私にお酒を飲ませ，自分も飲みました．
「O さあ，どんどん食べるがよい，どんどん飲むがよい，飲め，飲め.」
と言いました．私はお酒を飲みましたが，恐ろしいものですから，そんなにガブガブ飲みもしませんでした．
「もっとどんどん飲むがよい.」
と言いながら，お酒を注いでくれましたけれども，私は飲めないふりをして，ガブガブ飲みもしないで，食事をしました．若殿はぐいぐい飲んでいて，しばらくして私にたずねました．
「どこから来たのか？何という村から来たのか？」
と言いました．ですから，
「どういうわけでか，あのように，父は『P 私たちは和人のところへ交易に行ってはいけないのだよ．だから決しておまえも和人のところへ交易に行くんじゃないよ』と言ったものを，これはきっと，何かわけがあってそう言ったにちがいない，いま初めて和人のところへ交易に来て，ここで私の村の名前を言ったらいいか，どうしたらいいか？」
と考えたあげく，とんでもない村の名を言いました．そして，
「Q そこから私はやって来たのです.」
と言いました．R すると若殿は
「本当か？」
と言います．
「本当です.」
と私は言いました．R´ 若殿は何度も何度も
「本当のことを言っているのか？」
と聞きます．
「本当のことです．そして Q´ いま初めてやって来たのです.」
と私は言いました．彼は，
「母親も父親もいるのか？」
と私にたずねました．
「母も父もいますけれども，今はもう年をとって体も自由に動かないので，私が養っているのですけれども，P´ このたび初めて和人の国に交易に来たのですよ.」
と私は言いました．すると，
「それならいいよ．それなら，O´ さあさあ食べなさい，食べなさい．飲みなさい，飲みなさい．そして明日は私のあとから行くつもりでいなさい．この町の家並みにそって，しばらく下手の方へ行くと，町の向こうに小さな沢があるから，その小さな沢をさかのぼって，私がいつも山へ狩りに行き，毎日毎日行ったり来たりする道，私の踏み固めた跡が細道になっているから，それをたどって上って行きなさい．そしてずうっと行くと，私のいる所まで行くから，私のあとから来なさいよ.」
と言いました．
そして私はハイハイと何度も返事をしました．
すると，それから N´ 彼は自分のかたわらをトントンたたきました.
「M´ さあ，私のそばに寝なさい，寝なさい.」
と言いながら，自分のかたわらをトントンたたくものですから，私は彼のそばに寝床を作り，それからひどく恐ろしく思いながら，そのそばに寝ましたけれど，よくまあ殺されもせずに，生きていて，朝になりました．

そして朝になると，若殿はまたちょっと食べてから，L´家を飛び出して行きました．出がけに，
「K´アイヌの親方に二人分の食べものを背負わせて，私のあとからよこしなさい．」
と言いながら出かけて行き，そうして，家のご主人様夫妻は，それから，私が生きたままで夜が明けたのを喜んで，にこにこ笑いながら，いろいろなことを私に話していました．しばらくそうしていてから，
「言われたことにはそむくことができないのですから，さあ，あなたがたがお昼に食べるもの，二人分の，いろいろな上等な食べものを背負って，あとから行きなさい．行き方を教えられたのなら，そこから行くんですよ．」
と家のご主人様が言いました．私は言われたとおり，二人分のいろいろなおいしい食べ物をもらって，背負って行きました．
町の向こうまで行きますと，本当に，言われたとおり，小さな沢があって，沢づたいに上り下りしてひとりで歩いた跡らしくなっています．ずっと前からそのように行き来していたらしく，足跡が，びっしりついています．そしてその足跡をたどって行って，ずうっと山の中まで行きました．
すると，J´行く手にアイヌの小屋が見えました．すばらしくきれいな，屋根もかっこよくきちんと作られている，すばらしくしっかりと作られた，アイヌの小屋，新しい小さな小屋があるのを私は見ながら行きました．まっすぐその家に向かってずっと跡があるので，私はまっすぐその家に向かつて行きました．そうして行きましたが，あんまりすぐに家の門口まで行ってしまうのもためらわれ，ゆっくり行きました．静かに行きますと，行く手の方に，アイヌの歌う声が，上手な男の人の歌う声が，前方から聞こえてきました．そして，私はそこまで行きました．行きましたところ，家の門口まで行きますと，その歌声がぴたっとやんで，
「I´さあ，入りなさい，入りなさい．」
とあの若殿がにこにこ笑っていて，
「H´さあ，入りなさい，入りなさい．」
と言います．私が入りますと，それから彼はしばらく何も言わないでいてから，このように話しはじめました．
「アイヌの親方のあなたを，もう少しで殺すところだった．というのは，あなたの言うこと次第ではあなたの首を取ってしまおうと思っていたのだけれど，あなたはよその村から来たのだと言うから，本当にあなたの言うとおりなら，あなたを生かしておこう．そのわけはこうだ．私には父と母がいて，弟はまだおしめにくるまった乳飲み子だった．私は少し大きかった―というのはつまり，あとにまだ子どもができたのだから，この上の子もまだ幼い子だったんでしょう―そして，私たち二人とも父と母に連れられて交易に，母たちが，交易をしに私たちを連れて来て，この和人の町にやって来た．ここに，いま私たちがいる，私が住んでいる，和人の家に，私たちがやって来ると，どうしたわけか，母と父は逃げて帰ってしまった．そして私は，ひとり和人の所に置きざりにされたものだから，それから私は泣いて，わあわあ泣き叫びながら，『おとうさん！おかあさん！』と言って泣き叫びながら，浜の方へ走って行こうとすると，今の父である和人の旦那と母であるおっかさんが私をつかまえて，それから私のことで，せつない思いをし，私が泣くために，夜も昼も，二人はせつない思いをしながら，なにやかや，おもしろいものを見せてくれ，おもしろいおもちゃを見せてくれるけれども，私はそれをバンバンと下にたたきつけ，ぎゅうぎゅうふみつけながら，わあわあ泣いた．二人はいく晩もいく晩も眠らずに，一生懸命に骨を折って私をおもりしてくれた．それから本当によく育ててくれたものだから，このように学問も教えてもらい，刀も教えてもらい，槍も教えてもらって，私の父母はアイヌだったが，それで，私が学問もわからない，刀も使えない，槍もできないならば，『アイヌだったから，このように，育てても何にもならない』と父である殿，母である奥方に思われるのは，なさけないから，ほかの人よりも，槍も上手に，刀も上手に，学問もよくできるようになった．度胸もついた．こわいものはひとつもないように思うのだが，あんなに母たちのあとを慕って泣き叫びながら追いかけたが，あの私の弟があなたで，あなたひとりで私の母たちに育てられて，ここまで大きくなったのだろう，弟が大きくなったら，このくらいになっているだろうと私は思ったから，それで，たずねたのだったが，別人だとあなたが言ったから，あなたを生かしておく．私の弟だと言ったら，殺して，私も死のうとばかり思っていた．でも

あなたが別人だというのならば，どういうわけでこうしているのか，ふしぎに思うだろうから，言って聞かせるのだが，あんまり父母が恋しくて，父母のことばかり考えていると，どんなに学問ができ，刀が上手でも，自分の目の前に，母だった人，父だった人が，自分の目の前に見えるような気がして，ものを食べる気にもならない．学問をする気にもならない．そうしていて，大きくなるまで，そのように暮らしていたけれど，こんなふうな家に住んでいたような気がしたから，『鳥を打ちに行く』と言っては，山へ行くけれども，鳥を打ったりするために出かけるのではない．こんなふうな家に住んでいて育てられたように思った，そのとおりの家を作って，せめて気を晴らしたかったので，こんなふうな小屋を作り，それから，父が酔っぱらったり，酒を飲んだりして酔うと，こんなふうに歌を歌っていたような気がする，そのとおりに歌うと，いちばん気が晴れるので，こうして歌いながらここに来て，小屋を作って，それからここにいて，アイヌの歌をあれこれ歌って歌って歌って，自分の気を晴らしてから，家へ帰って行くのだ．鳥を打ちに山へ行っているものだと，父母は思っているのだけれど，私の気性の激しさを恐れて，何も言わない．そうして，これまで暮らしてきたのだったけれど，いまこのように，ひとに見られた．そして私がどのように思って歌っているのか，どう思って家を建てたのかを，あなたは見て，私を気の毒に思って，これからしょっちゅう来てくれたまえ．それから，これからは，しゃべって気が晴れたから，これからは，父である殿，母である奥方の言うことにはそむかないことにする．笑って見せもしよう．あなたのいるうちから，ちゃんと立派に話しかける．今まで笑って見せたこともなかったけれど，きょうからは，いま家に帰り，晩につれだって家に帰ったら，鳥を打ったら背負いもして，帰ったら，それからは，父だから，父の育て方がよかったのだから，父には父親に話すように話し，母には母親に話すように話して，これからは，なおいっそう，何でもよくできるようになり，人に見下げられないように，殿の跡をついで，大殿様の跡，私は一人息子だから，跡をついで，本当に立派なさむらいになるから，あなたは，くにに帰っても私を忘れないで，このように話をした者に会ったと思いながら，帰ってくれよ．」

と私に話しました．

泣きながら言うものですから，私も泣いてしまいました．私の兄なのだなあと畏いました．そんなことをしたのか，私の母と父が，そのように息子を置きざりにして和人にやって置いて行ったので，そのためにそれ以来，和人との交易もできないで，そのために，私たちは和人との交易をしないのだぞと言ったのだな，それでああ言ったのだったんだなあと思って，それから，あえてそのことを言わず，私が弟ですと言ったら私を殺すと言うので，言うのも恐ろしいから言いませんでしたけれども，そのために，なおいっそう泣きました．

「そうか，なるほど，私には，兄というものがあったのだなあ．」

と思って，ずいぶん泣きました．

それからその若殿も，つまり，その私の兄も，泣いて泣いて，一日じゅう私たちはいろいろと話し合っていましたが，それから，彼は鳥を打ち，鳥を二羽も三羽もとって，それから，私に背負わせて，私はそれを背負って，晩になって私たちは家に帰りました．彼は戸をあけてくれと言いましたが，今までになく，にこにこ笑いながら，戸をあけてくれと言いました．

「ただいま帰りましたよ．きょうはG´今まで鳥がとれなかったけれど，いま初めて，鳥を二羽も三羽もとりました．アイヌの親方と一緒だったから鳥をとって来ました．と，にこにこ笑いながら言いますと，その殿様もにこにこ笑いながら，その目いっぱいに水が出てきて，奥様も，なみだをはらはらこぼしながら，息子がいま初めて笑ったのを見たものですから，泣きながら喜んで，それから，私に礼拝を何度もくり返しました．

「親方がよいことを言ってくれたから，このように息子も今は気性がよくなって，これからは私の跡をつごうとし，このように心を決め，考えてくれたので，うれしく思い，いっそう感謝しますよ．」

と家のご主人様が言いますと，その若殿も，つまり私の兄も，それこそ，にこにこしながら，どれから話したらいいかと言うほど，いろいろな話をし，毎日毎日，

「F´さあ，まだしばらくいなさい．いなさい．」

と言われますけれど，E´私は恐ろしくて，ひょ

っとして村から一緒に来た人たちが私だとでも言い，私が彼の弟だとでもいうのを彼が聞いたら，殺されてしまうと思って，恐ろしいものですから，大急ぎでくにへ帰りました．D´いろいろなものの大荷物を持たされ，ほんとうにまあ特別にいろいろなものをいい値段で交換してくれて，私はそれを舟に積み，舟のともに座ってその船荷を見ながら，くにに向かって舟をこいで行きました．C´一緒に行った人たちの何倍も，たった一度行っただけなのに，彼らが二度も三度も行ったのと同じくらいたくさんの荷物を持たせてもらって帰りますので，うれしく思いながら帰りましたけれども，

「さあ早く帰って，クソおっかあとクソおやじを，せめて罵りでもして，貴を晴らそう．」

と思い，

「どういうわけで父と母は，兄を置き去りにして，こんなことになったのだろう．」

と思いながら，腹立たしく思い，兄のことを考えながら，人知れず泣きながら帰って行きました．そしてそれから岸に着き，家に帰りついて，父と母に，

「どうしてあんなことを言ったのですか．『私たちは和人と交易しないんだぞ．』とあなたたちは言っていたけれど，なぜそうだったのですか？なぜあなたたちは私を行かせなかったのですか？」

とおどして問いただしました．すると，

「B´なにも，悪気でしたことではないのだけれど，おまえには，兄さんがいたのだよ．そして，おまえの兄さんは，もう，よちよち走りまわるくらいになっていた．それからおまえはまだ，おしめにくるまった赤ん坊だった．おまえたち二人ともつれて，和人のところに交易しに行ったところ，町を治める大殿様，山の町だか，浜の町だかを治める大殿様が，子どものいない方で，そこに私たちは招じ入れられて，いく日も泊められたところ，彼らはその私たちの上の息子をもらいたがった．それから，とてもその子を置いてくにに帰ることはできない気がして，ていねいにお断りしたのだけれども，どうしてももらいたいと言う．そうして，六回も言うことに，殿様が六回も言うことにさからうことはできないものだから，それから六回も言われたら，もう，さからうこともできなくなってしまったから，承諾して，それから，私たちはその立派な息子を置いて，泣きながら帰って来たのだったが，それだから，おまえが行って，どうかして，おまえが弟だということをあの子が知ったならば，あの子は小さい時から目つきからして人と違っている子どもだったから，どうかして，おまえが殺されたら恐ろしいので，『和人との交易には行かないんだよ．』と言っていたのだよ．」

と言いました．

それから私は，両親をめちゃくちゃにののしり，ボカボカぶんなぐりました．父にも母にもそうしたのですけれど，私は両親をののしって，

「私の兄だったと今わかった人が，アイヌの家を作って，こういうふうなものの中で育てられたような気がするので，せめて，そういう家を作って気を晴らしそれからどんなふうにお父さんが歌っていたかを聞いていたから，お父さんが歌った歌のとおりに歌っているんだというふうに，身の上話をして，そして二人でさんざん泣いたんだけれど，私が弟だと言ったらば，殺されるから，弟だともしゃべらずに，帰って来たのです．」

と言いました．それから両親はさめざめと泣きました．

「そうだろうともねえ．」

と言いながら泣き，私も泣いて，そればかり考えてつらく思い，ああかわいそうに，まさか悪気で置いて来たのではないとはいうものの，あまりに気性が激しすぎる人なものですから，それであんなふうに思って，そればかり考えて，くやしがっていましたけれど，いまは，「これからは私は結婚もする．妻などいらないと断っていたけれど，妻も迎える．そして殿様の跡をつぐ．」

とも言ったのでしたから，私が帰ったら，そのあとで妻を迎えるのだろうとも私は思いました．A´そのとき以来，私が弟だということがばれるのが恐ろしい，行ってうそをつき，弟ではないと言ったことが恐ろしいから，それからは交易に行きません．

テキスト中に付された記号箇所を配列すると次のように表現できる．

A　日々の暮らし
B　交易に行かない

C　他の人の交易の様子
D　舟で出立
E　和人の村に着く
F　来なさい
G　はじめてのアイヌ商人
H　若殿の事情を話す大殿様
I　開けてくれ
J　私が見た光景
K　私のところに来なさい（若殿）
若殿の言葉に従いなさい（大殿様）
L　若殿の所へ行く
M　そばで火にあたりなさい
N　若殿が傍らをトントン叩く
O　食べなさい　飲みなさい
P　はじめて交易に来た（考え）
Q　そこからやって来た
R　本当か？
本当です
R´本当か？
本当です
Q´はじめてやって来た
P´はじめて交易に来た（言葉）
O´食べなさい　飲みなさい
N´若殿が傍らをトントン叩く
M´そばで寝なさい
L´若殿が出かける
K´私のところに来なさい（若殿）
若殿の言葉に従いなさい（大殿様）
J´私が見た光景
I´入りなさい
H´自分の事情を話す若殿
G´はじめて鳥が獲れる
F´まだいなさい
E´和人の村を出る
D´舟での帰還
C´他の人より多い荷物を持って帰還
B´交易に行かない理由
A´その後の暮らし

Aは，一連の出来事の「前」における「暮らし」であり，A´は一連の出来事の「後」における「暮らし」が書かれている．Bでは，「私」（この物語の「主人公」）に対し「父」が，「私たちの一族は昔から交易をしないことになっている」ということを伝えているのに対し，B´では，「主人公」の「両親」が「主人公」に，交易を禁止していた理由を伝えている．Cには，村人たちが交易に行って色々な品物を持って帰ってくることを羨む「主人公」の様子があるのに対し，C´では，「主人公」が交易に行って，人よりもたくさんの品物を持ち帰ってくる場面がある．Dが，「主人公」が舟で出立する場面であるのに対し，D´は，「主人公」が舟で故郷に帰ってくる場面である．また，Eでは「主人公」が「和人の村」に到着し，E´では「主人公」が「和人の村」から出立している．

Fでは，「大殿様」が「主人公」を招いており，F´では，「大殿様」が「主人公」を引き止めている．Gには，はじめての「アイヌの商人」であることを「大殿様」が喜んでいる話が配置されているのに対し，G´には，はじめて獲物が獲れたことを「若殿」が喜ぶ様子が配置されている．両者は，「はじめて」のものを「喜ぶ」という点で一致している．また，H・H´は，「若殿」の事情を話しするという点で共通している．

Iは，「若殿」が声をかけ，戸を開けてもらう場面であるのに対し，I´は，「若殿」が声をかけ，「主人公」を家に招く場面である．いずれも，「若殿」と「主人公」が対面する場面でもある．Jでは，「主人公」が「若殿」を観察しており，J´では，「主人公」は「若殿」が作った「アイヌの小屋」を観察している．K・K´には，「若殿」が「主人公」を招き，その上で，「主人公」が「若殿」の言葉に従うように「大殿様」が促す場面が書かれている．

Lは，「若殿」の所に「主人公」が近づく場面であるのに対し，L´は「主人公」がいる所から「若殿」が出て行く場面である．MとM´は，共に，「若殿」が「主人公」に対し，側に来ることを促している．また，N・N´では，共に，「若殿」が傍らをトントンと叩いている．O・O´では，「主人公」に対し，「若殿」が，「食べなさい，飲みなさい」と言っている．

Pでは，「主人公」は和人のところにはじめて来たと言うべきだと考えているのに対し，P´では，実際に，そのことを「若殿」に伝えている．また，Q・Q´は両方とも，「主人公」が「若殿」に，「ここに来た」ことを伝えている．そして，R・R´では両方ともに，「若殿」が「本当か？」と問いかけをし，それに対し，「主人公」が「本当です」と応えている．

このように，テキスト「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」は，合計18対の対応を持つ交差対句からなると解釈できる．この18対とい

う対応数は，前節で紹介したウウェペケレと比べて突出している．（２節のウウェペケレ①～⑤では，平均 8.8 対である．）

一方，テキストの文字数は 8828 文字であるので，一対あたりの文字数に換算すると 490.4 という値になる．ここで，前節で示した 5 編の平均値が 206.9 であるので，それに比べるとおよそ 2.37 倍である．つまり，テキスト「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」の場合，他の 5 編に比べ，対応数は多いものの，一方では，テキスト自体の長さが長い割には対応が出現する割合は小さいということになる．以下，２節で紹介した 5 編のウウェペケレにおける平均値と，本節におけるテキスト「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」の場合の値を表にして示した．

ウウェペケレ	対応の数	文字数	文字数/対応数
①～⑤の平均値	8.8 対	1820.4	206.9
３節のテキスト	18　対	8828	490.4

４．今後の課題

本稿で紹介したテキスト「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」は，語り終えるまで数日を費やすほどの長大なものではないが，①から⑤で示したウウェペケレに比べると約 4.9 倍の文字数を持つ．換言すれば，他の 5 編のウウェペケレに比べると規模の大きなものである．

本稿 1 節に述べたように，交差対句の使用が，アイヌにおける口承を記憶するメカニズムと何らかの関わりがあると筆者は解釈をしている．本稿での，より規模の大きな口承に見出せる交差対句についての知見は，アイヌ口承話者における記憶のメカニズムを解明する上で有用な資料であると筆者は判断した．今後，この点について調査をさらに進めたいと思っている．加えて，今後確認する予定の事柄を次に列挙する．

ⅰ：対応の出現頻度に対する話者の違いによる影響
ⅱ：さらに対応数の多いウウェペケレについての調査
ⅲ：ウウェペケレの規模と修辞構造の相関性について
ⅳ：交差対句を前提とした「語り」の類型についての調査

引用文献

[1]田村すず子．「サダモさんの昔話：沙流方言：民話 1」．『アイヌ語音声資料』．1986，第 3 号，2－19．
[2]大喜多紀明．「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察―交差対句と心意―」．『アジア民族文化研究』．2012，第 11 号，181－213．
[3]中川裕．「口承文芸のメカニズム―アイヌの神謡を題材に」．藤井貞和・エリス俊子編．『シリーズ言語態 第 2 巻 創造的言語態』，東京大学出版会，2001，61－78．
[4]Philippi, Donald L,“Songs of Gods, Songs of Humans: The Epic Tradition of the Ainu”,University of Tokyo Press.，1979.
[5]大喜多紀明．「「アイヌ神謡」の修辞パターンから心意を辿る（上）―「交差対句」を糸口として―」．『西郊民俗』．2011，第 217 号，24－32．
[6]大喜多紀明．「アイヌの挨拶表現と民俗的修辞構造」．『ポリグロシア』．2012，第 22 号，157－165．
[7]大喜多紀明．「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辞」．『比較民俗研究』．2012，第 27 号，133－144．
[8]田村すず子．「ワテケさんとサダモさん：沙流方言 会話・単語：タイトル」．『アイヌ語音声資料』．1984，第 1 号，1－11．
[9]田村すず子．「国松さんと幸作さんの昔話：二風谷・平取 ： 平村幸作さんの民話（1）」．『アイヌ語音声資料』．1988，第 6 号，58－63．
[10]大谷洋一．「〈調査報告〉松島トミさんの口承文芸６」．『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』．2004，第10号，77－123．
[11]田村すず子．「二風谷の昔話と歌謡・神謡：民話 5」．『アイヌ語音声資料』．1988，第 5 号，74－81．
[12]田村すず子．「国松さんと幸作さんの昔話:二風谷・平取：二谷国松さんの民話（1）」．『アイヌ語音声資料』．1989，第 6 号，2－9．
[13]田村すず子．「サダモさんの昔話：沙流方言：民話 5」．『アイヌ語音声資料』．1986，第 3 号，28－31．

Abstract

A text "The mother and the father gave *Wajin* the son and have placed him" by Satamo Hiraga which Tamura recorded were selected in this paper. The appearance of chiastic structure was checked in the text. The chiastic structure which has 18 pairs of correspondences in a text was found out. The purpose of this paper is to show the data about the chiastic structure expressed by the text. Investigation is not made till the present from the viewpoint which measures the number of correspondences and the frequency of appearance of correspondence in the chiastic structure found out by Ainu oral literature.

（受付日：2012 年 11 月 6 日，受理日：2012 年 11 月 15 日）

大喜多　紀明（おおぎた　のりあき）
所属：アジア民族文化学会

修士（理学）東京工業大学大学院総合理工学研究科.
専門：アイヌ民族の口頭資料についての研究．現在は，特に，修辞論的な視点からの研究を行っている．
主な論文：「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察―交差対句と心意―」（アジア民族文化研究，第 11 号）